

文献紹介

野間晴雄 編著

『文化システムの磁場—16～20世紀アジアの交流史— 関西大学東西学術研究所研究叢刊37』

関西大学出版部

2010年3月 369頁 3,200円+税

本書は、関西大学東西学術研究所における2005(平成17)～2008(平成20)年度の共同研究「システムとしての文化の比較研究—大航海時代を中心としたヨーロッパとアジアの邂逅—」の成果がまとめられたものである。編者のはしがきによると、同研究所は大坂の私塾である泊園書院の蔵書が関西大学に寄贈されたことに端を発し、元来は漢籍や中国関係の研究や史料集の刊行が活動の中心であったが、近年はアジアと他地域、アジアの域内の結びつきを重視した活動を行っているという。そのなかで、中国を核とするシステム以外に目を向け、「中国を専門としない研究者集団によって、アジアの多様な文化システムを、ネットワークとしてその外領域とどうつながってきたかを比較する共同研究」として、本研究は進められた。時代的には16世紀のいわゆる「大航海時代」以降を対象とし、地域的にはインド洋と南シナ海・東シナ海という2つの文化システムを含む「アジアの海」を対象としている。研究メンバーは地理学者と歴史学者からなり、ベテランから若手まで含まれる。取り扱われる時代・地域ともに広範で、多彩なメンバーゆえに、本書は多様な内容となっているが、その構成を示すと以下の通りである(括弧内は執筆著者)。

序 (松浦 章)

はしがき (野間晴雄)

- I アジア東部におけるサツマイモ栽培の伝播
(橋本征治)
- II 移行期の西インド洋世界と東アフリカ海岸社会—モザンビーク海峡史研究の覚書—
(北川勝彦)
- III ブルボン家の十字軍—ブルボン公ルイ2世のマフディア遠征—
(上田耕造)
- IV ヨーロッパ人のベトナムにおける貿易—平和

から戦争へ：16世紀～19世紀—

(グエン・ティー・ハーティン：野間晴雄訳)

V 紅河デルタ干拓の歴史地理—形成と変容—

(チャン・アイン・トゥアン：野間晴雄訳)

VI アジア「日本町」のかたちと交流史

(野間晴雄)

VII 18世紀後半英領インドにおける地図作製事業とレネル—「帝国」と地図のポリティックス—

(野間晴雄)

VIII ケルマーン絨毯というブランド—19世紀末に生じた世界商品への成長—

(吉田雄介)

IX 1930年代の石垣島における台湾人農業移民の入植過程

(水田憲志)

X 壱岐における在と浦の集落形態と交流

(松井幸一・野間晴雄・高橋誠一)

XI 西洋史学専門研究成果の公開—ひらめき☆ときめきサイエンスの実験—

(朝治啓三)

特別寄稿

XII 海峡から見たイスラーム交流史—とくにインド洋海域世界をめぐる問題—

(家島彦一)

あとがき (野間晴雄)

章のタイトルを一見してわかるように、各章の内容は上記の共同研究の趣旨に沿ったものばかりというわけではない。その点は編者も重々承知されていることであり、若手研究者の育成や研究成果の社会還元を配慮したうえでのことである。それをふまえて、各章の内容について簡単に紹介してみよう。

I章では、新大陸起源のサツマイモが、大航海時代にバタータス＝ルート(ヨーロッパ・アフリカ経由)とカモテ＝ルート(太平洋経由)で、フィリピンをハブ地域として台湾・中国・日本へいかに伝播していったかが、既往研究の検討を中心にして詳細に解説される。現段階でのアジア東部におけるサツマイモの伝播に関する最も詳しいレビューといえるであろう。

II章では、インド西岸からアラビア半島、東アフリカ海岸部にかけての西インド洋海岸地域においては、「森林」と「砂漠」という自然環境の対照性から、地域間の活発な交易が展開し、一体と

なった自立的な経済交流圏が形成されていたこと、モザンビーク海峡の両岸には、アフリカ人、アラブ人、インド人、欧米人などの移動性に富んだ様々な人々が居住し、各々が異質性を保ちながらも全体として一体感をもつ「海岸社会」が出現していたことが指摘される。

Ⅲ章では、14世紀末のブルボン公ルイ2世によるチュニジアのマフディアへの遠征は、かつて同様の遠征を行い聖人に列せられた先祖のルイ9世の行動を自らに重ね合わせ、自らの名声を高めさせようとするためであったとする。中世のヨーロッパの人々にとって海は魔物が住むとされる畏怖の対象であり、それを越えてイスラームに立ち向かう行為は、大いに評価されることであったという。地中海は交易路であったことからすると意外な感じがする事実である。

Ⅳ章では、16世紀以降ベトナムとヨーロッパ諸国（ポルトガル、オランダ、イギリス、フランス）との貿易は盛んとなったが、17世紀末以降、ベトナム側の王朝がキリスト教の浸透を警戒したことにより、ヨーロッパとの貿易は閉ざされていったことが示される。17世紀以降の鎖国傾向は日本と類似しているが、筆者はそのことは当時の王朝の大きな過失であったと評価している。

Ⅴ章では、紅河デルタの開発過程が通時的に概観された後、タイピン省ティエンハイ県を事例として、19世紀前半における干拓による開発の過程が、人員組織や土地管理システム、村落計画、土地配分方式、用水管理（潮汐灌漑システム）などの面から明らかにされる。その開発のあり方からは有明海などの新田開発が思い起こされる。なお本章は、本誌50-1（創立50周年記念国際会議特集号）2008、に掲載された論文が改題・改稿されたものである。

Ⅵ章では、16世紀の東南アジアの「日本町」を港市システムのなかに位置づけ直すとともに、ベトナムの国際交易都市であったホイアンがもつ位置的特性がフエ、ダナン（ツーラン）との比較で論じられる。そして、朱印船と日本町の様子を描いた絵巻として著名な「茶屋新六交趾国貿易渡海図」を取り上げ、描写内容の考証を行い、描かれた日本町はホイアンではなくツーランであるとする。ただし、ではなぜ当時ベトナム最大の港市であったホイアンが描かれなかったのかについて

は、疑問は残されたままであるとしている。

Ⅶ章では、「地図」のポリティックスに関する方法論的検討が行われた後、イギリス人のレネルが作成した2種類のインド地図、最初の『ベンガル地図帳』と後の『ヒンドスタン地図』の内容が詳細に検討される。そして、両者における地図作成に関わる姿勢の違いは、イギリスとインドとの政治的関係の変質や植民地の拡大過程が関係していたことを指摘する。英領インドがかたちあるものとしていかに形成されていったかが追究されており、非常に興味深い。

Ⅷ章では、イランの特産品として知られるケルマーン絨毯が、少量の注文生産で希少品・高価であった状態から、タブリーズ商人の参入によって生産者が増加し、大量生産される世界商品となっていったこと、それによって産地は欧米の不安定な景気変動の影響を受けるようになり、増産と減産を繰り返す状況に陥ったことが明らかにされる。各地の在来産業の近代化過程で一般的にみられる傾向がケルマーン絨毯でも見いだせるといえよう。

Ⅸ章では、1930年代の大同拓殖会社による台湾から石垣島へのパイナップル生産を目的とした農業移民について、その入植過程が、入植地の状況や農耕技術と土地利用のあり方、病気への対応法、石垣島民との関わりなどの面から明らかにされる。マラリアに対して台湾人移民は、感染を防ぐのではなく、栄養を取って体力を維持し発病を防ぐという方法で対処していたという指摘は、文化の違いによる病気への対応の違いとして興味深い。

Ⅹ章では、奄岐における農業集落である「在」とそれに含まれる社会単位である「触」、漁業集落である「浦」について、旧郷ノ浦町渡良地区を事例として、集落の形態と機能を明らかにするとともに、屋号に似た「門名」の特徴について考察している。本章は関西大学における学部の実習調査の成果がまとめられたものであり、集落景観図など丹念なデータが提示される一方、論文としての完成度は高くない感があるのは致し方ないところであろう。

Ⅺ章は、イギリスとフランスの百年戦争を糸口にして、国家の形成過程について高校性に考えさせる公開授業の内容をまとめたもので、院生の協

力を得て実施した実践記録である。この公開授業は、体験型の授業を通して大学で行われていることを社会に発信し、グローバル化する現代社会への対処能力を養うことをねらいとして行われた。実践のなかで歴史地図の作成が重視されているのは、歴史地理学の立場からは喜ばしいことである。

XII章は、特別寄稿とあるように、他章とは異なり、研究所の招待による家島氏の講演と質疑応答の記録である。イスラーム史の研究者の立場から、インド洋世界をめぐる地域間交流の歴史について概括的、かつ理論的な内容が展開されている。共同研究で弱かったイスラーム世界の交流史の内容が補足されるとともに、インド洋全体に関わる交流史に展望が与えられる内容となっている。

以上であるが、共同研究の趣旨をふまえると、本書の中心的な内容は、南シナ海・東シナ海、および西インド洋における人とモノの交流とその拠点について扱った章（I, II, IV, VI, IX, XII）とみることができよう。このような広範な内容を包括する概念が、本書のタイトルともなっている「磁場」である。編者は、人とモノ（情報や言語も含む）の動きによって示される、個々の社会が干渉しあったり、結びついたり反発したりする様子を、磁力の引き合いや反発、干渉の作用になぞらえ、それらの力が働く場を磁場と呼んでいる。紹介者なりの理解では、個々の場所ですべて、どのような磁場が形成され、個々の社会が相互にどんな関係を結んでいるかを問う見方ということであろう。この磁場という概念は、文化や歴史研究の分野では、まだ十分には吟味されていないかもしれないが、非常に興味がそそられる概念であり、言葉のもつ独特の響きとともに本書を魅力に富んだものにしていく。

また、本書では意識的にインド洋、南シナ海・東シナ海といった海域が研究対象として取り上げられており、地域スケールの大きな研究が志向さ

れている。本来このような広範な地域を扱った研究は、地理学の一分野である歴史地理学が担うべきといえるが、最近では歴史学にお株を奪われた感がある。本書で特別寄稿しているイスラーム史を専門とする家島氏のインド洋を舞台とする交易・交流の研究などは、自然環境をベースにし、空間的ネットワークを問題としている点など、まったく歴史地理学といってよい内容である。現代の歴史地理学研究は、世界スケールからみるならば、ミクロな実証的研究が多く、大洋や大陸レベルのマクロスケールの研究が不足しているように思われる。しかし、ミクロな研究をふまえた上でのマクロスケールの研究にこそ歴史地理学の真髄があるのではないだろうか。その点からは、地理学者が中心となって進められた本共同研究とその成果である本書は、高く評価されるべき内容を有しているといえよう。

本書のようなスケールの大きい学際的研究が行われるには、相応の研究環境が必要である。関西大学には東西学術研究所を母体とする環境が整っており、そのような環境にない他機関の研究者にとっては羨ましい限りであろう。2005年度からは文科省の補助を受けて、同研究所のもとには、アジア文化交流研究センターが設けられた。さらに2007年度からは同研究所・センターの活動が下地となって、グローバルCOEプログラム「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」が採択され、その研究・教育機能はいっそう強化されてきている。今後のさらなる研究の展開が期待されるころである。

なお、本共同研究が推進されるなかで、研究所主催により、アジアと世界の文化交流に関する国際シンポジウムが2007年に開催され、その成果として、橋本征治編『海の回廊と文化の出会いーアジア・世界をつなぐー』関西大学出版部、2009、が刊行されている。アジア海域のネットワークと港市に関する研究など、本書と密接に関わる論考が掲載されているので、併せて読まれることをお勧めしたい。

(中西僚太郎)